

【旧約聖書日課】創世記 24章62～67節

⁶²イサクはネゲブ地方に住んでいた。そのころ、ベエル・ラハイ・ロイから帰ったところであった。⁶³夕方暗くなるころ、野原を散策していた。目を上げて眺めると、らくだがやって来るのが見えた。⁶⁴リベカも目を上げて眺め、イサクを見た。リベカはらくだから下り、⁶⁵「野原を歩いて、わたしたちを迎えに来るあの人は誰ですか」と僕に尋ねた。「あの方がわたしの主人です」と僕が答えると、リベカはベールを取り出してかぶった。⁶⁶僕は、自分が成し遂げたことをすべてイサクに報告した。⁶⁷イサクは、母サラの天幕に彼女を案内した。彼はリベカを迎えて妻とした。イサクは、リベカを愛して、亡くなった母に代わる慰めを得た。

【使徒書日課】コロサイの信徒への手紙 3章18節～4章1節

3 ¹⁸妻たちよ、主を信じる者にふさわしく、夫に仕えなさい。

¹⁹夫たちよ、妻を愛しなさい。つらく当たってはならない。

²⁰子供たち、どんなことについても両親に従いなさい。それは主に喜ばれることです。²¹父親たち、子供をいらだたせてはならない。いじけるといけないからです。

²²奴隷たち、どんなことについても肉による主人に従いなさい。人にへつらおうとしてうわべだけで仕えず、主を恐れつつ、真心を込めて従いなさい。²³何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心から行いなさい。²⁴あなたがたは、御国を受け継ぐという報いを主から受けることを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです。²⁵不義を行う者は、その不義の報いを受けるでしょう。そこには分け隔てはありません。

4 ¹主人たち、奴隷を正しく、公平に扱いなさい。知ってのとおり、あなたがたにも主人が天におられるのです。

【福音書日課】マタイによる福音書 12章43～50節

⁴³「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。⁴⁴それで、『出て来たわが家に戻ろう』と言う。戻ってみると、空き家になっており、掃除をして、整えられていた。⁴⁵そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊を一緒に連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。この悪い時代の者たちもそのようになる。」

⁴⁶イエスがなお群衆に話しておられるとき、その母と兄弟たちが、話したいことがあって外に立っていた。⁴⁷そこで、ある人がイエスに、「御覧なさい。母上

と御兄弟たちが、お話ししたいと外に立っておられます」と言った。⁴⁸しかし、イエスはその人にお答えになった。「わたしの母とはだれか。わたしの兄弟とはだれか。」⁴⁹そして、弟子たちの方を指して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。⁵⁰だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である。」

「ここに家族がいる」【こども説教のために】

日曜日の朝、わたしたちは、教会へと呼び集められてきました。二千年前、弟子たちを呼び集め、その営みをお始めくださった主イエスが、今も、わたしたちを呼び集めてくださっているのです。

わたしたちには、それぞれ、毎日の生活を共にする家族があるでしょう。大人になって自分が生まれた家族からは離れて生活するようになる人もいるかもしれませんが、自分の生まれ育った家族があることには変わりありません。そのわたしたちのことを、日曜日の教会に呼び集めてくださった主イエスは、ご自分の家族だとおっしゃってくださいます。「**見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる**」と。

もちろん、主イエスにも、ご自分の生まれ育った家族がおありだったのです。主イエスが成人して家を出て、洗礼者ヨハネから洗礼を受け、「天の国は近づいた」と教え始められるようになって、その主イエスのことを心配する母親がいました。母親は、息子が何歳になっても、心配するものなのでしょう。また、主イエスには、息子のことを心配する母親を気遣う弟たち妹たちもいました。息子のことや心配で出かけていく母親に、弟たちも付き添って行くことがあったのです。成人して家を出ても、家族であることに変わりないと、お互いのことを心配し合う家族が、主イエスにはおありでした。

それでも主イエスは、ご自分に従ってきた弟子たちを指して言われたのです。「**見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる**」と。主イエスは、ご自分と共に**天の父の御心を行う**生き方を始めた者たちを、「**わたしの兄弟、姉妹、また母である**」とお呼びになられたのです。

いいえ、まだ、そのように生き始めることができていなくても、ご自分と共にそのように生き始めて欲しいと願われたすべての人のことを、ご自分の家族とお呼びくださっているのです。

わたしたちも、主イエスに「わたしの兄弟、姉妹、また母」とお呼びいただくために、教会へと集められて来ました。天の父の御心を行う者たちの家族、神の家族の子ら、神の子らとされるためです。日曜日の教会に集められてきたわたしたちだけが特別なわけではありません。すべての人が招かれて、神の家族の子らと呼び合う者とされることを、主イエスはお望みなのです。

《家族》と共にいる

7月8月と、キリスト教学校から課題を与えられて礼拝に出席される中高生を迎えてきました。今日も駆け込みでそのような生徒がいらっしゃるかもしれません。教会としては、一回限りではなく、ぜひ続けておいでいただきたいと願っていますが、そうしてくださる方は多くはないようです。もちろん、部活動や友だち付き合い、塾や習い事などが忙しい中で、年に一度でもおいでくださる一人ひとりを、教会は歓迎いたします。

学校の課題のために出席してくださる方に付き添って、ご家族が一緒においでくださることがあります。大抵はご両親のどちらかですが、ご兄弟が一緒においでくださることもあります。初めてのところに一人で行くのは不安でしょうし、送り出されるご家族も心配なさるのは当然です。むしろ、わたしは、学校のほうから、家族そろって出席するように促して下さっても良いとさえ思っています。学校の課題を提出しなければいけない生徒の皆さんよりも、それが無いご家族のほうが、色眼鏡無しで教会を見ていただけたと思うからです。

実際、お子さんをキリスト教学校に進ませられ、その子に付き添って教会に出席するようになり、結果的に洗礼を受けて信者になられたという方は、少なくないのです。わたしたちの教会にも、何人かそのような方がいらっしゃいます。不思議なことのようですが、そういうものなのかもしれません。人は、強いられて関わることに對しては主体的になれなくても、そうでないことに對しては柔軟に心を開き、主体的になれることがあるのです。

もちろん、学校から強いられて出席されることになった中高生の皆さんにも、どこかで心を開いて、主体的な目で教会の営みを見ていただけるようになってほしいと願っています。

かつて教会は、中高生や青年ばかりが集う場と見られていました。思春期から青年期の、いわゆる反抗期の若者が、自分の家族や学校から離れて自由になり、新しい仲間を見つける場所として、教会が選ばれていた時代があったのです。最近の若者には、そのような場所は必要ないのかもしれません。反抗期らしい反抗期もなく、いつまでも家族と仲良くいるという若者は、少なくありません。学校も、かつてのように画一的なことが求められるのではなく、一人ひとりの個性が大切にされる場になっています。

それでも、家族や学校に自分の居場所を見出せなくなる若者がいなくなったわけではないでしょう。たとえそこに居場所があると思っているとしても、そこが本当に安全な場所であるという保証もないでしょう。

教会は、すべての人を《家族》の一員として迎えようとする場所です。そう思ってもらえる場所、集まりになろうとしているところなのです。

《家族》を迎える

先主日の午後、今夏の「こどもの教会サマープログラム」を実施しました。本日発行の「月報」にも、その様子を記させていただきました。コロナ禍前、「流しそうめん」を売りにしていたころには大勢の参加者がありましたが、「流しそうめん」をやめてからは参加者は限られるようになっていきます。多くは普段から来てくれている子どもたちで、その子たちが友だちや兄弟を連れてきてくれることもあります。また、稀に飛び込みで参加してくださる方もありますが、最近は宣伝も難しいので、滅多にないことです。それでも、子どもたちと普段の奉仕者に加えて、青年たちやゲストで神学生も参加してくれましたので、とても賑やかな一日となりました。

サマープログラムでは、最初に必ず、お互いの名前を確認する時間を設けています。名札は付けているのですが、それとは別に、全員が自分の名を紹介し、呼び方を確かめ合うようにしているのです。もちろん、皆がすぐにお互いの名前を覚えられるわけではありません。特別な呼び方を決めても、どうしても普段通りの呼び方に戻ってしまうこともあります。それでも、お互いの名前を確かめ合うときを大切にしているのです。

わたしたちは、家族の中に新しい命が誕生すれば、まずその子に名を付けます。正式な名を付けるだけでなく、呼び名を決めることもあるかもしれません。繰り返しその名を呼び、呼ばれ、そして、家族の一員となっていくのです。人を一人、家族に迎えるために、わたしたちは必ず、そうするのです。

サマープログラムのテーマは「ザアカイ、おりてきて！」でした。ルカ福音書 19 章の伝える徴税人ザアカイの物語です。彼は、主イエスを見ようと登った木の上において、名を呼ばれたのです、「ザアカイ」と。名を呼ばれた彼は、急いで降りて行き、主イエスを自分の家に迎え入れました。自分の家族に迎え入れたのです。主イエスがザアカイの名を呼んで、彼を「神の家族」に迎え入れてくださったとき、ザアカイも、主イエスを自分の家族に迎え入れていたのです。一人の人を家族に迎え入れるとき、その一人も、家族を自分のものとして迎え入れているのです。

わたしたちの家族は、不完全です。人として欠けがあるので不完全ですし、ときにその一員が欠けることで不完全になります。わたしたちは、いつでも、不完全な家族の欠けを、どこかで補わなければなりません。族長イサクが、母サラの死後、その後を埋めるように妻リベカを迎えたように。だれかを、いつも家族に迎え入れていなければ、わたしたちの家族は不完全なままです。

神の家族であろうとする教会は、家族が不完全なままでは良くないと知っているのです。主イエスが始めてくださった神の家族の営みを通して、わたしたちは、すべての者が迎えられる完全な家族になろうとしているのです。